

各種新聞圖解の内
郵便報知新聞

第五百九十八號

晋子が吟み我雪と思へ程
き番傘と肩傘で通る兩國
の河も埋る斗ある二月下旬の
銀世界富む雪の名に又對て
貧は迫て飢勞れ克絲布子よ
堪兼る寒苦と詫て橋上より
身と逆まふ投棄んと力泣く
欄干に足踏みお後より止る力士い
綾瀬川山左衛門が門人玉手三八と
呼きて強き大漢此老人が苦情の一部
始終を聞いけ鬼も挫く丈夫が鬼の眼
あらぬ仙氣は襦袢の袖と干あへ説諭を加へ
死と止め持合せする微薄の金と與へて帰る
至仁の所置い名もい水に清き綾瀬
川が教ふ習ふ善良弟子い。母子の中の玉手
瀧磨く心の光澤ぞうはく

小説の作者

轉々堂藍泉記

